

吉川竹三郎の孫たち

吉川竹三郎の孫たち

吉川竹三郎には九人の子供があり、その子供があわせて二十五人いる。

福井百合子、笹倉聖子、飯田不二子（昭和四十一年没）、吉川竹四郎

吉川芳郎（平成三年没）、佐野あさ子、吉川三郎（昭和六十年没）、吉川順子（昭和四十三年没）、吉川五郎、吉川守

塩田妙子、野口千鶴子、八鳥亨治、八鳥恂治、中村節子

高橋都、石倉薫、吉川清

岡田ともこ、坂本洋子、吉川武

永井雅幸、吉川均

西尾通卓、西尾治郎

これらは兄弟か従兄弟の関係になる。少子化が叫ばれているときに、この数は立派である。兄弟でも会う機会が少ないのだから会ったことの無い組み合わせもあるろう。

系図の順にならべたが、大正十三年生まれの福井百合子さんが最年長で昭和35年生まれの吉川均君が最年少だ。竹三郎は昭和12年に70歳で亡くなったので、昭和11年生まれのは1年半の接触があったらしい。大半のかたは写真だけしかみたことがない。

吉川家の先祖のことは、同じ年の吉川五郎氏が精力的に調べた。また我が家は本家ということから、いまでも竹三郎時代の資料（家宝？）が残っている。長柄、相川、水無瀬、成城、そして鶴沼と4回の引越しをしても資料が残っているのは、母ふみ子を守ってきたからだろう。竹三郎にかんする話は守口のおばさんや娘の西尾綾子さんから聞けるだろう。当時竹三郎が亡くなった時に女学校の一年だった姉百合子が語り者だろう。

ここでは、竹三郎に似た名前をつけた私竹四郎が聞き伝えの竹三郎像を述べて、孫たちの消息を伝えよう。

竹三郎伝記

竹三郎は太左衛門三男として、和歌山県海南市日方に明治元年に生まれる。太左衛門は漆器関係の仕事をしていて、和歌山県史、海南市史などの郷土誌に名前がある。また紀三井寺に懸け仏を寄進して、今も紀三井寺の正面に残っているそうだ。竹三郎は三男であつたので、独立しなければならなかった。昭和五年に書かれた黒江

1 吉川竹三郎の孫たち

の郷土誌に地元出身の実業家として次の記事がある。

明治元年当町六ヶ浜に生まれる。小学校前のことなれば、永正寺にて僧侶に学びその間家業漆器職をなす。されど青雲の志止み難く兵役後単身大阪市に出づ。さる織屋に奉公し、ネルカキをなし（ネルは繊維の名前）、綿の買入れなどを為す。その後種々雑多に商売の途を経て、その間困苦筆舌に尽くし難し、後に毛布売買を開業し、ここに漸く曙光の望むべきものあり、漸次発展を來たし、現在帽子製造会社を經營す。実に立志伝中の人たるを失わず、氏は教育事業に貢献せんものあり、遂に大阪市に淀の水高等女学校を經營し女子教育に尽力し、更に昭和四年甲種此花商業学校の設立許可を得て、その經營に着手しつつあり、現在大阪実業界に氏の高潔なり人格の賞賛さるるも故なきに非ず。

美辭麗句を並べているが、要は丁稚奉公からはじめて、商売に成功したのだ。どれくらい儲けたかを推察するに、私立学校を二校作るだけの金があった。今の金でざつと100億円ぐらいを息子2人に学校をやってみよと与えた。それ以外に各地に借家をもっていたので、息子たちへの投資は当てにしないで豪華に暮らした晩年（60歳代）だった。

竹三郎は長柄で合資会社吉川毛織で、鐘紡からただ同然の切れ端を仕入れて、これをゲートルにして、大阪

にあった第八連隊に納品してぼろ儲けをしていた。この会社は個人經營の吉川帽体にかわり、帽子のフェルトを製造する。これが支那への輸出であたる。これらの工場跡地に此花商業ができるのだが、この職種替へは儲けのピークを感じるや、安全な蓄財のためと思われる。

竹三郎の先祖が和歌山海南市黒江で漆器で儲けたが、紀州藩にほとんどを吸い上げられた苦い経験からくるもので学校法人にして残したかったのだろう。

竹三郎は2回結婚している。タミさんとの間には太三郎と芳三郎の2人の男の子ができたが、タミさんは苦勞の時代ばかりで亡くなった。その後、紀州の林家のイトさんと結婚する。タミさんやイトさんが字を書けなかったので、女子教育の必要性をまのあたりに感じて、女学校を作ろうとする。

淀の水女学校を大正13年に設立したとき、太三郎24才、芳三郎21才のため教員の資格がなかったのかもしれない。淀の水の初代校長は吉川以外の人が校長をしていた。その後長男の太三郎が2代校長をして、昭和4年に此花ができて、太三郎が此花に移ったので、芳三郎が第3代校長となった。

しかし、職員等の確保に児玉輝彦氏がその当時から助けていた形跡がある。児玉輝彦氏は太三郎の妻吉子の兄であり吉子が太三郎より4才年上だから30才の

働きざかりであろう。児玉家は鹿兒島の士族であった。小使いの松本さんまで鹿兒島から呼んでいる。

そのころ芳三郎は紀州の士族西岡家から嫁喜代子をもらう。そして住吉に分家して屋敷6棟をもつ。つまり5軒の借家がついていた。

竹三郎は長女嬉子の夫である八島治一氏をブレインとして、信頼していた。八島氏は伊勢の庄屋のどの学者である。戦後関西大学の文学部長をつとめた。八島治一の名は両方の学校の幹部先生だった。

昭和8年頃の此花の資料からは、三男正三が先生をしているし、四男武雄が学校の裏方として彫刻家を探しに走っていたり、五男千代造が第一回の卒業生として名前がある。

孫たち

昭和23年に戸籍の法律がかわるまでは、戸主のもとに一族がすべてひとつの戸籍に載せられた。昭和12年戸主竹三郎が死んで、戸主は孫の竹四郎になる。昭和11年に長男太三郎はすでに死んでいるからである。その頃の戸籍には、私のもとに、母、姉、おじ、おば、従兄弟すべて記載されているのには驚いた。

福井百合子 三重県上野市在住 娘夫婦と孫2人暮らし 栄介氏は造り酒屋の次男だったので、お酒をお

くつてくれる。

笹倉聖子 東京都世田谷区在住 夫とOLの一人娘と3人暮らし 光男氏は神戸市役所、下水道事業団、クリタに勤めた。

故飯田不二子 飯田宏さんとの間に森本知子あり。

故吉川芳郎 陸軍士官学校、検事、弁護士。新聞には元福岡地検検事正とあった。益子夫人は川西市在住

故吉川三郎 幼稚園経営、市議員。早苗幼稚園は長男巧一氏が理事長。守口の家には、喜代子、美恵子、巧一夫婦そして子ども3人の四世代が暮らす。

故順子 幼稚園を手伝っていたが若くして亡くなった。

吉川五郎 東新建設社長、新日本薬品役員 枚方市在住 奥様は金沢生まれの尚子 娘二人

吉川守堺市在住 会計コンサルタント 奥様はみさ子 一男一女

塩田妙子 愛知県豊田市在住 塩田氏は豊田通商勤務だった。NY勤務経験。

野口千鶴子 吹田市在住 野口氏は味の素勤務だった。娘二人 札幌と練馬に住まれた。

八島亨治 保谷市在住 協和銀行の支店長だった。
子供は娘2人

八島恂治 鎌倉市在住 日立ソフト勤務 子供は息子2人

中村節子 大阪在住

高橋都 正三の長女 神戸市在住 阪神大震災罹災の経験あり生協コープ事務局勤務 高橋氏は書道家娘の名は葉。

石倉薫 正三の次女 攝津市在住 看護婦の資格あり、小学校の養護室勤務

吉川清 大阪在住 府立高校の体育の先生。

岡田ともこ 武雄の長女 大津市在住 岡田氏は大丸香港支店長 香港に詳しい。娘の名は千里（ちさと）

坂本洋子 武雄の次女 高槻市在住 病院勤務

吉川武 高槻市在住 ガスの店経営

永井雅幸 千代造長男 伊丹市役所勤務

吉川均 千代造次男 群馬県伊勢崎市在住 娘1人

西尾通卓 新日鉄から大阪の大学の先生へ 姫路市在住

西尾治郎 永大産業の研究員 堺市在住

吉川竹四郎 コンピュータプログラマー、喜美子と2人暮らし 息子は直紀と郷生（クニオ） 郷生の長男は千里（センリ）

〒251 0037 藤沢市鵠沼海岸6-16-4 吉川竹四郎
Tel.(0466)30-1466

吉川竹三郎の孫たち 4